



第三回ローザンヌ世界宣教会議 が私たちに伝えていること

東京聖書学院教授 西岡 義行

第三回ローザンヌ世界宣教会議が、2010年10月16～25日にかけて南アフリカのケープタウンにおいて開催されました（日本ホーリネス教団・東京聖書学院からは、錦織寛師と西岡が参加）。世界の198ヶ国から4千人を超える福音的信仰を標榜するキリスト者のリーダーが集まりました。自費で参加した千人を超えるボランティアスタッフを含めると5千人以上の者が、今日における福音宣教を真剣に問い、語り合い、祈り合いました。この会議を紹介し、その意義をここでまとめてみたいと思います。

世界の現実を反映

今回の会議において注目されるのは、説教者や発表者の3分の2以上がアジア、アフリカ、ラテン・アメリカを代表する方々であったことです。今から百年前にエジンバラでもたれた世界宣教会議では、その出席者の大多数が欧米人で、わずかにアジア人はいたものの、アフリカやラテン・アメリカからの代表がいなかったのです。この大きな変化は、世界宣教の軸が文明先進国の欧米から、百年を経て大きく他に移ったことを反映しています。特にこの百年のアフリカ、ラテン・アメリカおよびアジアでの大きな変化と宣教のうねりが反映されているのです。それは、しばしば北から南へ、西から東への軸の移動として捉えられたりしてきました。

こうした世界の大きな変化をあの会場で肌で感じることができたのは、実に大きな感動であり、チャレンジでした。別の面から出席者の傾向を見てみましょう。出席者の35パーセントが女性で、55パーセントが50歳以下、さらに10パーセントが30歳以下でした。前のステージで発表し証しする方々の中に女性や若い方々が多かったことは、今回の大きなテーマである「和解の福音」が必要とされる世界の現実を反映していると思われる人がいます。実際私たち福音を委ねられた者は、世界各地の紛争

や対立および急増する難民、差別や迫害、世界規模で広がる貧富の格差および飢餓や貧困に喘ぐ人々の現実に置かれています。さらに、HIV/AIDSの問題や人身取引など、女性や若い世代の目で見なければ見えてこない「引き裂かれた世界の現実」があり、若い世代の将来を脅かす深刻な環境破壊の問題にも直面しているのです。

今回の大会は、具体的な世界の痛みを直視し、その現実の只中にある一人ひとりの証しに耳を傾けました。それは、世界の代表者をひとつにするほどの深い大きな感動がありました。その背後におられる主の臨在を覚え、主への真の礼拝へと自然に招き入れられたのです。その具体的な内容は、以下のホームページでご覧になれます（<http://www.lausanne-japan.org>）。

こうしたことの背後には、社会的責任に関して今まで抽象的に議論してきても、その現実を直視し、そこに関わってこなかったことへの深い反省と悔い改めがあったことは、決して忘れてはなりません。

福音の包括的視点に向けて

2010年にケープタウンで開催されたことは、深い意味があります。まず、1910年の歴史的な「世界宣教会議」の百年目の年であるということです。これは重要なエキュメニカルな会議で、立場や教派を超えて宣教のビジョンで一致したことは、宣教の歴史において大きな出来事でした。

ところが、人類史上未曾有の殺戮がなされようとする世界大戦が迫っているにも関わらず、そのような歴史的・社会的現実に対する預言者の使命を果たせなかったことは、否定できません。こうした教会の自己批判は、教会中心の宣教ではなく、社会的現実に対する宣教へとシフトすべきであるという声となっていくべきです。しかし、この課題に取り組む中で、伝道を優先するべきか、社会の現実にもまず答えるべきかという議論をめぐって、保守的な立場と自由主義的な立場が対立していきま

した。この立場の対立は、伝道と社会的責任との分離という悲劇がもたらされたのです。主イエスの宣教には見られないこの不健全な分離は、その後のプロテスタントの宣教に暗い影を落とすこととなります。



会議が行われたケープタウン
国際会議場

二〇世紀中盤のこうした課題を克服するために、さまざまな動きが福音派の中で生まれ、その結実が1974年にスイスのローザンヌで開催された、世界宣教会議だったのです。そこでは、もう一度福音の豊かさを見直し、聖書の權威とキリストの独自性を堅持しつつ、魂のみならず社会の現実をも変えていく福音の豊かな理解へと開かれていきました。

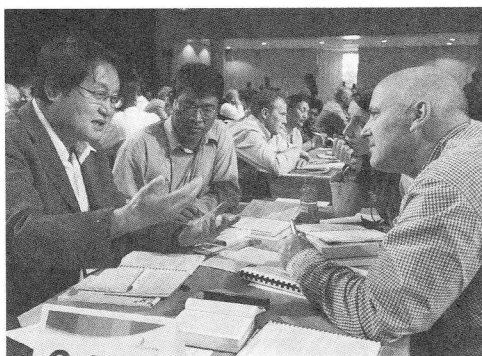
全福音を委ねられた全教会の改革

今回の世界宣教会議での中心となった標語は、「全教会が全世界に全福音を」でした。これは、すでに1974年に発表されたローザンヌ誓約(Lausanne Covenant)の第6項に登場します。「犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである。世界伝道は、全教会が、全世界に、福音の全体をもたらすことを要求する」。

この三つの「全」(whole)は、1989年にマニラで開催された第二回の会議で発表された「マニラ宣言」(Manila Manifest)の骨格となりました。そして、福音を委ねられた私たちキリスト者の全て(全教会)が、全世界を網羅する世界規模のビジョンを掲げてひとつになったのです。そこから、具体的な宣教の働きに向かう三百を超える新たな戦略的パートナーシップが誕生しました。宣教の主体としての教

会、対象としての世界、そして宣教の中身である福音への理解が広がり、同時にその多岐にわたる使命(ビジョン)が明確に示され、個人も教会も宣教団体も全てが結集していった点で大きく評価されます。

しかし、包括的福音に「生きる」という点で課題が残りました。それは、福音派の教会の二〇世紀における躍進と深く関係しています。確かに、主流派といわれる教会の低迷と比較すると、その躍進は大きな目を見張るものがありました。しかし、次第に教会自体が自己目的化し、その拡大と維持に心が奪われ、さらに宣教の成果が見えやすくなるために、福音が矮小化させていったのです。また、こうしたことへの神学的反省と宣教プロジェクトの実践とが、分離していったことは、この問題の改善を遅らせることになりました。自己目的化した教会は、世界の現実



6人ずつのテーブルグループで国や人種や性別を越えて分かち合い、議論し、祈り合った

から遊離し、部族化し分断化された世界を作り上げ、自らが安住できるその特殊世界を維持しようとすることへと逸脱します。そして、社会の闇や課題、地球規模の課題などに責任ある姿勢で臨むことせずに、結局は気がつくことと社会の闇が、逆に教会の世界に入り込んでしまっているのを見るのです。だからこそ、クリス・ライト神学委員長は、福音宣教を危機に追いやるものは、他宗教でも迫害でもなく、神の民の中に入り込んでいる見えざる偶像であるとし、悔い改めと福音派の新たな「宗教改革」を迫りました。

ケープタウン決意表明

ケープタウンでの第三回会議では、「全教会が全世界に全福音を」という言葉が、単なる神学的標語やお題目として終わってはならないという強い思いが共有されました。それは、キリスト者は世界の苦悩する現実、真の意味で「和解の福音」をもたらすものとして召されているという確信によりです。この確信は、会議の最終日に発表された「ケープタウン決意表明」(Cape Town Commitment)において明らかにされました。この文書は、今までの公式文書を引き継ぐものとともに、性格を異にしていることが明らかです。ローザンヌ誓約では、聖書の權威を確かなものとしつつ、より広い福音理解への門戸が開かれ、マニラ宣言ではそ



最終日の聖餐式

の具体的展開がなされました。しかし、今回の文書は、それを表明する者のあり方そのものが問われるものとして発表されたのです。英語の表現ではコミットメントとなっており、自らその内容に責任をもち、存在をかけて取り組むことを自らに問うことが含まれています。ですから、この文書を口にする者の誠実さが問われており、行動を伴わない言葉との決別をも表明するものなのです。そのニュアンスをあらわす日本語として「決意表明」と訳していますが、それでも強い献身的参与への重みを十分表現し尽くすことは困難でしょう。

この「ケープタウン決意表明」が、自らの献身の表明として読まれることを、心から願ってやみません。(序文は、クリスチャン新聞の11月14日号に掲載／前述のホームページでの閲覧も可)